

# ハワイにおける志田房子の活動〈1955-1956〉

—琉球舞踊の「文化使節」として—

波照間 永子

## Abstract

The purpose of this study is to focus on the activities of Fusako Shida, a Ryukyuan dancer who was the first person certified as an Important Intangible Cultural Property holder, during her period of residence in Hawaii (1955-1956) and to clarify the actual situation based on newspaper articles, performance programs, official documents, and interviews with Fusako for her activities as a “cultural envoy” that connects Hawaii and Okinawa. Through the study, I elucidate some aspects of Fusako's personal history that are still unknown as well as positioning her activities in the history of Okinawan dance. Fusako's activities in Hawaii marked the beginning of the full-fledged introduction of Ryukyuan dance overseas after the war.

Fusako contributed to strengthening the relationship between Hawaiian music world and Okinawan music world, nurturing local Ryukyuan dancers and widely disseminating the artistry of Ryukyuan dance.

She also played a symbolic and social role to introduce postwar “Okinawa's revitalization” to Hawaii's Okinawan immigrant community under the movement of “Return to Japan Movement” and “Cultural Revival Movement” backed by Ryukyuan government, Okinawan music world, and newspapers. Through the activities, Fusako herself gained a sense of mission to convey Okinawan culture, not as an individual, but as a representative of Okinawa, and this mission became the guiding principle for her subsequent life as a dancer.

### 1. 問題の所在と目的

重要無形文化財「琉球舞踊立方」各個認定保持者に初の認定<sup>1</sup>を受けた志田房子（旧姓 根路銘、以下、房子と記す）は、米軍占領下、9歳で沖縄民政府主催芸能審査会に合格した。これを機に舞踊家としての活動を始め87歳の現在も国内外で活躍している。その歩みの一端は、インタビュー記事等で紹介されているが、個人史として捉えた研究は少ない。波照間（2012）は房子が出生地の沖縄で10人の師に学んだ経緯を個人史の前段として纏めている。これを踏まえ、本稿では房子が18歳のときハワイに渡り、約8か月間滞在して沖縄系移民に舞踊を伝えた「文化使節」としての活動を明らかにする。

房子は、このときのハワイ公演を「琉球舞踊が、戦後初めて海外で公演されることでもありましたので忘れることができません。…布哇は第二の故郷の心地であります」<sup>2</sup>と振り返り、その後の海外公演の嚆矢となったと述べている。事実、戦後、房子以前に渡布した沖縄芝居や組踊の実演家は、乙姫劇団（1951〔昭和26〕年2月）、東京・大阪合同琉球芸能団（1951〔昭和26〕年6月）の2団体である（比嘉，1978：230-250）。このことから1955〔昭和30〕年～1956〔昭和31〕年のハワ

イにおける房子の活動は、戦後、琉球舞踊が海外に本格的に紹介される先駆けとなったものであり、房子の個人史のみならず戦後の沖縄舞踊史においても極めて重要である。

### 2. 先行研究における本稿の位置づけ

房子は1937〔昭和12〕年、那覇に生まれた。3歳より玉城盛重に師事する。沖縄戦で師を失った後、仲井真盛良、田島清郷、西平守模、真境名佳子、金武良章、金城宗善、玉城盛義、島袋光裕、新垣義志らに学んだ。結婚を機に夫の出身地・東京に拠点を移すも沖縄での活動も継続し、文化庁芸術選奨文部大臣賞、国指定重要無形文化財「琉球舞踊」（総合認定）保持者、沖縄県文化功労者表彰、文化庁長官表彰、沖縄タイムス賞、国指定重要無形文化財「琉球舞踊立方」（各個認定）保持者認定、旭日小綬章受章に至る功績を残す。

#### 2-1. 琉球芸能実演家の個人史に関する先行研究

これまで、琉球芸能実演家の個人史は次の4点から記録されてきた。①当事者が自叙伝の形式で記したもの（島袋，1982；渡嘉敷，1979）、②弟子らの講演記録に芸歴書を付したもの（沖縄芸能

史研究会, 1995; 當間, 2020), ③研究者が, 当事者や弟子の語りに諸資料を照合し纏めたもの(大城, 1991; 波照間, 2007), ④当事者, 弟子, 研究者による①②③を統合して編集したもの(真境名由康一人と作品—刊行委員会, 1987; 真境名由康一人と作品—刊行委員会, 1990; 新垣松含記念誌編集委員会, 2004; 渡嘉敷守良記念誌編集委員会, 2005; 真境名佳子伝刊行委員会, 2011; 高良, 2005; 山田貞子記念誌編集委員会, 2007)等である。①以外は, 当事者の逝去後に刊行されており, 実演家人生の集大成を記録・評価したものである。一方, 近年のオーラル・ヒストリー研究においては, 当事者が現役で活躍している時期にインタビューを行い, 語りをアーカイブ化する重要性が示唆されており, それに基づく琉球芸能実演家の研究が期待される。

房子の個人史に関しては, 彼女が出生地の沖縄で師に学んだ経緯を房子の語りから分析したオーラル・ヒストリー研究(波照間, 2012)がある。また, 房子の活動の一端や舞踊思想をインタビューや鼎談に基づき紹介した報告(真榮里, 2017; 森田, 2020; 志田房子・志田真木・三浦, 2021; 志田房子, 2024)もあるが, ハワイでの活動には触れていない。房子と琉球舞踊界にとって, ハワイ時代(1955-1956)は、「戦後初の海外公演」を果たしたという重要な出来事であるが, その実態は知られていない。1952[昭和27]年, 日米安全保障条約が発効され, 日本は主権国家として独立を回復したが沖縄は米国の施政権下に置かれた。沖縄社会は何故に房子をハワイに送り出し, 房子はどのようにその任務と向き合ったのか, ハワイ沖繩系移民社会はいかなる理由で房子を招聘したのか, という問いが本稿の基軸となっている。

## 2-2. 芸能実演家によるハワイ—沖縄間の移動を扱った先行研究

ハワイにおける実演家の活動は, 比嘉武信編著(1978)に概説されている。同書は, 時系列で活動概要を記録しているが音楽の分野が中心で舞踊の記述は少ない。また沖縄から一時的に来布した実演家の活動も記しているが詳述するには至っていない。民族音楽学の領域では, 遠藤(2015)が, ハワイ沖繩系移民による民俗芸能エイサーの実践と展開を纏めている<sup>3</sup>。同論文は, 移民社会で継承されるエイサーだけでなく, 移民の帰国がホスト社会・沖縄のエイサー実践にもたらす影響も含め, 実践者の移動でダイナミックに展開する芸能の様相を示す。また, 民族舞踊学者のヴァン・ザイルは, ハワイ非ポリネシア系舞踊家のアイデンティティを扱った論文で, 沖繩系三世のシェリル仲宗根が, 沖繩へ留学し外国人として初の最高賞を受賞して帰国, ハワイに舞踊スタジオを開設し

た事例をあげている(Van Zile, 1996: 38)。同様にハワイ沖繩系移民が沖繩に赴き師のもとでコンクール入賞を果たしハワイに戻り沖繩文化の普及に貢献する事例が多数報告されている(Sutton, 1983: 59)。これらの移民を対象とするハワイから沖繩への移動とは逆に, 沖繩からハワイを訪れた実演家に着目し, その目的, 内容, 意義を探る視点も重要であろう。

しかしながら, この視点に立ち, 琉球舞踊家の活動にアプローチした先行研究は管見の限りない。

一方, 日本本土の演奏家の訪米を扱った研究に早稲田(2002)がある。早稲田は, 戦前の南カリフォルニア日系社会の人々が, 日本から招聘あるいは派遣された日本人演奏家による演奏や指導を通じて, 彼らの文化的権威である自国の文化と密接な関係を築くことができたことと指摘し, このような演奏家の役割を「文化使節」と称している(早稲田, 2002: 69)。「文化使節」は次の役割—①日本の現代音楽芸術・芸能の提供者, ②日本の演奏技術の教師, プロモーター, ③西洋音楽文化受容の触媒—を担い, 日系移民が直面した人種差別や文化的対立の中で求める文化の模範となったという。戦後はさらに演奏家の流入と新一世師匠の増加が続いた。早稲田は, 過去一世にわたる南カリフォルニア日系社会の音楽文化の生成と変遷を分析し, 影響を与える要因としてエスニック・マイノリティとしての立場, 社会的経済的地位の変化, 世代交代, 米政府の政策, 日本文化の流入, 日米関係, 音楽的適合性をあげ検討している(早稲田, 2022: 388-399)。その一要素に位置づけた日本文化の流入において訪米演奏家の役割と影響を詳述しているが, 主たる訪米理由については「日本以外の国で成功したいという願望と野心」と一括りに纏めており, 演奏家を受け入れた移民社会の考察に焦点を置いている。

本稿は, 早稲田による先の「文化使節」の概念を適用するが, 焦点は沖縄からハワイに渡る房子と沖縄社会に置き, ハワイにおける活動(1955-1956)の実態を明らかにする。これにより未だ知られていない房子の個人史の一端を解明するとともに当該活動の沖繩舞踊史における位置づけを試みる。

## 3. 方法

次の資料とインタビューに基づき, 渡布の経緯と背景および「文化使節」としての活動を辿る。①新聞記事: 『ハワイ報知』『布哇タイムス』*Hawaii Times*/ 『沖繩タイムス』『琉球新報』, ②公演プログラム等: 琉球舞踊重踊流所蔵, ③琉球政府文書: 『公報』(1954) 『文化財要覧』(1956)等, ④比嘉武信編著『ハワイ琉球芸能誌: ハワイ沖繩人78年の足跡』(1978)他。

新聞記事はハワイ沖繩センター<sup>4</sup>にて筆者が収集した記事他、房子の母・新垣ツルが収集し、房子の夫・志田義則に保存を引き継いだものである。同記事を主な一次資料とし、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルム（原資料：ピショップ・ミュージアム所蔵）およびスタンフォード大学「邦字新聞デジタル・コレクション：ジャパニーズ・ディアスポラ・イニシアチブ（JDI）」<sup>5</sup>で典拠を閲覧し掲載日を確定した。さらに房子へのインタビューも実施し、資料記載事項の事実確認と、本人にとってのハワイ時代の意味を問うた（2024年6月20日、於：重誦流）。

#### 4. 沖繩からハワイへ

##### 4-1. 文化財保護委員会の推薦・沖繩芸能界の激励を受けて出発（於：沖繩）

###### (1) 文化財保護委員会の推薦を受けて—1955〔昭和30〕年5月

1955〔昭和30〕年3月、玉城盛義から教師免許状<sup>6</sup>を受けた房子は、同年8月18日、ハワイ泉川龍泉會の招聘を受け母と共にハワイに渡った。「泉川龍泉會會名披琉球大演藝会」（以下、大演藝会と記す）出演のためである。泉川龍泉會は1953〔昭和28〕年、ハワイ州に設立された琉球古典音楽野村流の一団で会主は泉川寛永である。招聘に際し房子が沖繩文化財保護委員会専門委員の推薦を受けたことが推薦文に記されている。同委員として、島袋光裕、上間朝久、西平守模、金武良章、玉城盛義、田島清郷、古堅盛保、池宮喜輝、屋嘉宗勝、幸地亀千代、平良雄一、宮里春行が列記されている。舞踊・音楽・演劇界の師が一丸となって推薦した。以下は、ハワイの沖繩人幹部と沖繩人連合会にあてた推薦文<sup>7</sup>である。

房子さんは幼少の頃より琉球舞踊に精進し玉城盛重先生の指導を受け先生歿後は引續き玉城盛義、田島清郷兩氏の指導を受け古典舞踊並に雑踊、新作舞踊等習得し十餘年間の練磨の功報ひられ一昨年日本文部省主催第八回藝能祭参加に當り選ばれて琉舞古典舞踊を上演…又昨年沖繩タイムス社のベストテン一位の榮冠を勝ち得本年も續いて群舞に入賞す。吾々は布哇の同胞が琉球の舞踊に歡心を持たれ根路銘房子を適當な人物と認め招聘されるに當り萬腔の賛意を表し茲に良き琉球舞踊の紹介者として推薦するものであります。1955年5月1日

この推薦文には、ハワイ泉川龍泉會が房子の招聘を要請、沖繩文化財保護委員会専門委員が推薦した経緯と主な推薦理由—①玉城盛重らに師事し

古典、雑踊、新作舞踊（創作舞踊、新舞踊とも呼ばれた）を修得の上、文部省主催第八回藝能祭に出演、②沖繩タイムス主催コンクール1位入賞—が明記されている。

推薦文中の沖繩文化財保護委員会は、琉球文化財保護委員会のことで「琉球」を「沖繩」と誤記したと推察される。房子渡布の前年（1954年6月）、琉球政府は文化財保護法を公布し、同年10月、文化財保護委員会規則及び文化財専門審議会規則を定め、同審議会に「第三分科会：無形文化財に関する事項」を置いている（〔琉球政府〕行政首席官房文書課、1954：46）。専門委員の無形文化財担当委員「常任専門委員」には、演劇部門に山田有功・島袋光裕、舞踊部門に護得久朝章<sup>8</sup>・西平守模、民謡部門に平良彦一、音楽部門に古堅盛保・屋嘉宗勝・池宮喜輝（琉球政府文化財保護委員会、1956：34）が配される。このうち光裕、守模、盛保、宗勝、喜輝は先述の推薦人でもある。房子の推薦には同審議会と保護委員会専門委員が含まれていた事実は確認できるが、公文書に記録がないため、琉球政府による公式の推薦とまでは断定できない。

また、推薦理由に文部省主催藝能祭出演とある。これは沖繩の日本本土復帰運動促進をめざし結成された第一次沖繩芸能使節団による芸術祭参加公演「琉球國劇公演」（1953〔昭和28〕年）を示す。もう一つの推薦理由に、沖繩タイムス社主催舞踊ベストテン入賞とある。1954〔昭和29〕年、沖繩タイムス社の創業者・豊平良顕は沖繩文化協会を設立、「文化復興運動」の一環として新人芸能祭を開催した。郷土の伝統芸能を文化遺産として保存し継承発展させることを目的とする。

以上から、房子は、大演藝会出演を目的に招聘されたのであるが、背景には、日本政府文部省芸術祭参加による「日本復帰運動」、琉球政府文化財保護法公布・施行による文化財保存活用<sup>9</sup>の機運、沖繩タイムス社芸能祭創設による「文化復興運動」など、地上戦から10年を経て醸成される沖繩復興の兆しをみることが出来る。房子は単に舞踊を披露し沖繩系移民に指導するという役割だけでなく「沖繩再生」のシンボルとしてハワイに送り出されたと考えられる。

###### (2) 根路銘房子ハワイ公演激励藝能会—1955〔昭和30〕年7月-8月

ところで、房子の渡布を実演家らはどうのように受けとめたのだろうか。ハワイ出発前の7月30日・31日にコザ（現在の沖繩市）の室川劇場で、8月8日・9日は那覇劇場で「根路銘房子ハワイ公演激励藝能会」が開催された。プログラム<sup>8</sup>には次のように記されている。

今回ハワイ沖繩人幹部並に音楽舞踊団連合が一致して、琉球舞踊家として名声高き根路銘房子嬢を**公式に招聘**し、其の正当琉球舞踊をハワイ全同胞に鑑賞せしむる事となり、房子嬢は八月中旬渡布いたしますので、此の天才舞踊家の初めての海外公演をして美果を結ばしむ可く、これを激励し力づけ、大いに喜んで送る為に、こゝに激励芸能会を開催致すことになりました。1955年7月 会長 海外協会長 稲嶺一郎（太字下線は筆者による）

執筆者・稲嶺一郎は1953〔昭和28〕年琉球海外協会の会長に選出され、翌1954〔昭和29〕年に琉球政府の使節として北米、南米を巡歴し移民計画の基礎を築いた<sup>9</sup>。海外移住政策を推進する稲嶺率いる「根路銘房子ハワイ公演激励芸能会」は、島袋光裕、玉城盛義、田島清郷、西平守模、宮城能造、上間朝久ら「世話役」と、琉球政府の「賛助員代表」である。比嘉秀平（琉球政府主席）、大濱國浩（立法院議長）、仲松恵爽（上訴裁判所長）、屋良朝苗（教職員会長）、當間重剛（観光協会会長）、仲井間宗一（前上訴裁判所長）、山里永吉（文化財保護委員会副会長）、豊平良顕（沖縄文化協会会長）で構成される。稲嶺の挨拶文に「ハワイ沖繩人幹部並に音楽舞踊団連合が…**公式に招聘**」と記されていることから、房子の渡布は公式な招聘であり、実演家だけでなく政府側も賛意と奨励の意を表していると読み取れる。

番組をみると、房子が古典女踊り《柳》、創作舞踊《鷺の鳥》、組踊《銘苅子》の天女役（銘苅子役は宮城能造）を演じている。また、田島清郷《諸屯》、西平守模《花風》、玉城盛義《箭の浜》、金武良章《万歳》、玉城盛義・宮城能造・島袋光裕《金細工》など歴代の師が得意芸を披露するほか、山田貞子《貫花》、新垣澄子《揚作田》ら女性舞踊家第一世代、玉城節子・嘉手刈静子《木綿花節》ら第二世代も出演している。地謡は古堅盛保、池宮城喜輝、屋嘉宗勝、平良雄一、幸地亀千代、宮里春行による。音楽・舞踊・演劇各界を牽引する師が房子の海外進出を支援し送り出している。

このように一人の舞踊家の海外公演を他の実演家が激励し公演を行うことは稀である。当時は琉球舞踊に流会派はなく舞踊家らが交流し得意芸の指導を仰ぐ伝承の慣習が残存していた<sup>10</sup>。その恩恵に預かった房子を、ベテランから中堅・新人に至る実演家が総出演して激励している。琉球舞踊を通し復興再生に向かう沖縄芸能界の現況を、ハワイ沖繩系移民に伝える役割を房子に託し送り出したと考えられる。

## 4-2. ハワイ沖繩系移民に伝える沖繩文化（於：ハワイ）

### (1) 表敬訪問—1955〔昭和30〕年8月20日

ハワイに到着した房子親子は翌8月20日、宮城榮吉師範、仲嶺眞助（沖繩人連合會副會長）、泉川寛永他の案内でハワイ報知を訪れ、翌月から房子が舞踊の指導を始めると報告した<sup>11</sup>。さらに8月23日には、ハワイ州知事キング、ホノルル市長ブレイスデル、日本総領事館、日本人商工會議所等を訪問した<sup>12</sup>。英文版*Hawaii Times*<sup>13</sup>には、房子のツアーは、泉川龍泉会がスポンサーとして主催し、琉球政府関係者と民間人組織「ハワイ公演激勵芸能会」の資金提供で行われたとある。

### (2) 幸地亀千代・ナヘ夫妻との合同歓迎会—1955〔昭和30〕年8月25日

房子と同時期に琉球音楽の幸地亀千代・ナヘ夫妻も渡布していた。亀千代は歌三線の野村流音楽協会6代目会長、妻のナヘは箏曲家（後の沖縄県指定無形文化財技能保持者）で房子の箏の師である。夫妻は、ハワイの野村流会員への指導と教師免許を授与する目的で招聘された。房子が出演する大演藝会は歌三線奏者の免許披露公演という目的も担っており（比嘉、1978：34）、授与者として野村流の権威である亀千代が招聘された。8月25日、布哇琉球音楽協會主催「亀千代・ナヘ夫妻と房子の合同歓迎会」が曹洞宗別院ホールにて催され、夫妻の独奏と房子の舞踊も披露された。また、ハワイ音楽界で功労のあった人物を表彰する傳達式も行われ、亀千代から仲眞良樽金<sup>14</sup>と宮城榮吉<sup>15</sup>師範に表彰状が授与された<sup>16</sup>。これはハワイにおける歌三線奏者の正当性が、ホスト社会・沖縄の権威、亀千代によって認められ、ハワイ野村流音楽家と沖縄野村流音楽家との関係を強化する儀式であった。

### (3) 二世三世への稽古—1955〔昭和30〕年9月—1956〔昭和31〕1月

9月から大演藝会に向けて約4ヶ月半の集中稽古が始まった。房子は稽古の様子を『ハワイタイムス』<sup>17</sup>で次のように語っている。

…私供の師事しました前記玉城、田島兩先生始め諸師匠の嚴格の指導で一番に力を入れて下さった事は三部一體と申しまして舞踊の一大要素で、目、足、手が最も大切で、それに腰の入れ方、體の動作にも気をつけねばなりません。古典物ほどテンポが遅くなって参りますが、然し決して止まって居るのではなく、所謂「静中動」あります。私共只今當地の二世、三世の方々にも此點をよく心得て頂いて教えて居ります。…習う方は相當上手の方も

あり、又始めての二世三世の男女の方の手解きから教えて居りますが幸いに私の言う事をよく聴いてメキメキ上達して居られます。…琉語も歌詞も餘り解せざる方でもよく覚えて上手になって居られるので正月の公演會は期待されて居ります。

技法の特徴を伝えるとともに、沖縄語、琉歌の通じない沖縄系移民二世・三世へ稽古をつける様子が窺える。また、先の記事では「芸能界の有力者が一致団結し私の爲に激勵して下さって海外協會長稲嶺一郎氏を會長として、ハワイ公演激勵藝能會が組織され、コザ（室川劇場）、ナハ（那覇劇場）で四日間に亘って激勵公演を盛大に催して下さった事を思うと私の責任の重大なる事を感じ益々精進したいと思つて居ります」とも語っている。さらに別の記事<sup>18</sup>では「戦争で沖縄の文化、藝術は徹底的に破壊されましたが、ポツ／＼戦前の域に復活しつゝあり、特に音楽舞踊は戦前以上盛んになつてゐるようです」と沖縄芸能界が発展の途にある状況にも触れている。

#### (4) 舞踊の講演：護得久朝章と共に—1955 [昭和30] 年9月-12月

房子は稽古の傍ら、9月から昼間はハイスクールとポロレイ英語学校に学び<sup>19</sup>、10月からはテレビ局・カニ放送局KGMB「琉球の時間」の臨時アナウンサーを勤め沖縄の文化を発信した<sup>20</sup>。さらに12月2日には、布哇琉球音楽協會の主催で、琉球大学基本財団議長・護得久朝章<sup>21</sup>による講演に出演した。琉球大学は、米政府が沖縄統治の安定化を進める教育文化政策として1950 [昭和25] 年に設立された。講演は「自然の形を採り入れて美を出す琉舞の基本、手の當て方（肘）、腰（ガマク）の入れ方、足の曲げ方廻り方、眼のつけ方などを解説されたが藝能人たちが一般にも極めて好参考であった<sup>22</sup>と報じられた。講演の後、朝章の《高平良萬歳》他、房子の《揚作田》、在ハワイの高嶺秀子<sup>23</sup>の《前之濱》等が披露された。司会は仲嶺眞助、歌三味線は宮城榮吉と仲眞良榎金が務めている。

出演者の大部が房子の招聘に関わった沖縄人連合役員、野村流歌三線の師範、ハワイの中堅舞踊家である。朝章の講演は、翌月の大演藝會を前に、琉球舞踊を紹介するとともに、沖縄の高等教育機関および文化行政に携わる要人との繋がりを強化する役割を含むものであった。

#### (5) 泉川龍泉會會名琉球大演藝會・一般への教授と公演—1956 [昭和31] 年1月-2月

翌1956 [昭和31] 年1月14日、大演藝會の盛況ぶりが報じられた<sup>24</sup>。「舞踊の部」では、在ハワ

イの舞踊家らの《特牛節》で祝意を表した後、房子が古典女踊り《柳》《總掛》《天川》、雑踊り《花風》《秋の踊り》、新舞踊《月下に戯れる》《浦島》（玉城盛義作）、《鷺の鳥》（玉城盛義原案・房子振付）を踊った。新聞に掲載されたプログラム<sup>25</sup>には、房子が踊る演目の幕間で、ハワイの二世・三世らが、古典舞踊や雑踊りのほか、盛義作、または盛義の原案で房子が振付けた新舞踊の演目に出演している（表1）。房子は4ヶ月半の限られた期間で、14もの演目を指導している。

大演藝會の後、房子は一般の人々への教授を開始し、公募で集まった人々に稽古をつける傍ら、マウイ島のワイルク、ボールドウィン・ハイスクール講堂（2月17日）、ハワイ島ホノカア（18日）、ヒロ・ハイスクール講堂（19日）等で公演を開催した。また在ハワイ沖縄各村県人会からの依頼にも応じ琉球舞踊の普及と交流に奔走した<sup>26</sup>。

#### (6) 送別琉球演藝の夕：映画界からの誘い—1956 [昭和31] 年3月-4月

このようなハワイでの活動が評価され、日活映画社から入社依頼があった<sup>27</sup>背景には当時の日本本土における沖縄ブームがあったと推察される。1953 [昭和28] 年、『ひめゆりの塔』（今井正監督、東映）が公開され、当時の映画興行記録を塗り替えるヒット作となった。映画の制作に先んじ1951 [昭和26] 年、同原作を基にモダンダンスの石井みどりらが創作舞踊を発表、さらに宝塚歌劇団雪組によるレビュー『ひめゆりの塔』（菊田一夫作・演出、1953年）も上演された。映画・舞踊・演劇界における沖縄ブームのなか、房子の映画界入りが要請されている。ハワイでは根路銘房子後援會が結成され「根路銘房子嬢送別琉球演藝の夕」（3月24日）が開催された。同公演では、房子の独演は《諸屯》のみで、ハワイの舞踊家や弟子らの踊りを中心に演出された<sup>28</sup>。MCを仲嶺眞助と瀬長清吉、舞台係を外間勝美らが務めた。

4月14日、房子親子は日活映画社との契約交渉のためハワイを出帆した。しかし日活は演技の勉強に専念することを許さなかったため房子は契約を辞退して沖縄に帰郷した。

### 5. 房子のハワイ招聘の理由と背景

以上、約8ヶ月にわたる房子のハワイ滞在期の活動をみてきた。このような房子の活動はハワイの芸能界に何をもたらしたのだろうか。

#### 5-1. ハワイの音楽舞踊界における琉球舞踊の状況と課題

まずは房子来布以前におけるハワイ琉球舞踊界の状況を、繪島洋太郎<sup>29</sup>（作家・演出家）の寄稿「琉球舞踊の將來について」<sup>30</sup>から確認する。以下

表1. 泉川龍泉會名披琉球大演藝会「舞踊の部」プログラム

(1956 [昭和31] 年1月11日の記事を基に筆者が作成。強調文字は房子出演・振付演目)

No.	ジャンル	演目名	出演者
1	古典若衆踊り	《特牛節》	備瀬玉江 備瀬君江 當山スミ 鳥袋榮子 房子
2	新舞踊	《鷺の鳥》(原案:玉城盛義, 振付:房子)	金城初江 池原貴美子
3	雑踊り	《浜千鳥》	備瀬君江 鳥袋榮子
4	古典女踊り	《本嘉手久節》	備瀬玉江 備瀬君江 池原貴美子
5	雑踊り	《谷茶前》	泉川ミツエ 呉屋チズ子
6	古典女踊り	《柳》	房子
7	古典二才踊り	《江佐節》	池原貴美子 當山スミ
8	古典女踊り	《総掛》	房子
9	古典二才踊り	《前の浜》	金城義信
10	新舞踊	《小濱節》(房子作)	備瀬玉江 備瀬君江
11	新舞踊	《浦島》(玉城盛義作)	浦島:房子 乙姫:金城初江 侍女:池原貴美子 備瀬君江
12	古典二才踊り	《揚作田節》	金城初江
13	新舞踊	《月下に戯る》(玉城盛義作)	男:房子 女:池原貴美子
14	古典女踊り	《天川》	房子
15	古典女踊り	《踊りクワデサー》	備瀬玉江 備瀬君江
16	雑踊り	《秋の踊り》	房子
17	雑踊り	《むんじゅるー》	池原貴美子
18	古典二才踊り	《湊くり節》	當山スミ 鳥袋榮子
19	雑踊り	《花風》	房子
20		フィナーレ	房子他総出演

に要旨を記す。

[1920年代～1940年代前半]: 一世の舞踊家が活躍し、琉球音楽と共に琉球舞踊は隆盛したが、舞踊家の結婚および日米戦の影響で舞踊界は衰微した。

[1940年代後半～1950年代中期]: 日米戦後、音楽の二団体(仲真音楽會と宮城音楽會)による沖繩救済基金を募る演芸会開催で琉舞は復活、二世・三世子女の優秀な舞踊家を輩出したが引退した。

[1950年代前半]: 二世、三世子女の中堅舞踊家が活躍しているが、彼女らが結婚や仕事で引退した場合琉舞界は實に淋しい状態でありその保存継承が危ぶまれる。

[1950年代後半]: 根路銘房子の来布を機に、古典・新舞踊等を二世、三世に修得せしめ、滅びんとする琉舞保存のためにハワイ琉球音楽協会に琉球舞踊保存会を創設することを要請する。政治的背景と個人的要因でハワイの舞踊家が継続して活動できない問題を提起し、房子来布を機に舞踊の保存継承を願うと綴られている。当時ハワイでは、音楽家の組織が確立され伝承の仕組みが整っていたが、琉球舞踊は十分な体制が構築されていなかった。これを裏付ける資料に、沖繩人

連合會副会長の仲嶺眞助による次の提言「舞踊家に望む」がある。

沖繩舞踊の師匠たちは日本舞踊の師匠の様に名取免許もなければ、専門的に舞踊教授のみで弟子たちの養成に尽力される方がほとんどいないのは残念であります。…二世三世のハワイ育ちの娘たちに古典舞踊を教授する時は特に音楽の歌詞の意味を理解させ、…「思入」(情緒)はどうあるべきか其の舞踊にふさわしい衣裳の選択とか云った様な所まで細心の注意を払って指導に当たったら素質の良いハワイの二世三世達の舞踊が一段と輝り観客に真に迫るものを感じしめると思います。…幸にハワイに於ける琉球音楽研究熱は、今まさに黄金時代で音楽団体、芸能団体合わせて十五と云われる程で、…優秀な師範を始め五人の教師号免許者や立派な箏の師範免許の宮城・仲真師範たちが揃って幾多の二世三世の弟子たちの養成に一生懸命であり、琉球音楽保存の上からも喜ばしい限りであります。…琉球舞踊研究も組織的に立派な指導者の下に練習されたら、恵まれた体格と良き素質と相まって南国の舞姫として其の豊かな情

緒と絢爛優雅な舞姿は各国人種にうらやましがられる事でしょう。(1954年1月、仲嶺、1978：150-151, 183-184に所収)

仲嶺は、ハワイ音楽界の発展に比し、琉舞界は名取免許制度もなく<sup>31</sup> 伝承体制が未だ構築されていない点、二世・三世舞踊家は歌意の伝承が困難で、情緒の表現が乏しい点を指摘している。また沖繩系移民だけでなく各国人種に認められる水準に達すべきと要望している。

冒頭で引き合いに出された日本舞踊は、当時、ホノルル邦楽・邦舞界でも一際飛躍していた。坂東流、藤間流、花柳流、西川流、尾上流等の諸流諸派が確立し、舞踊会では日本から家元や師匠を招き指導を受け、賛助出演してもらうのが定例であった(田坂、1985：108)。1946〔昭和21〕年には日本舞踊、唄、三味線、鳴物の師匠が「ハワイ三葉会」を結成、同会発起人の一人、花柳三津秋らが1950〔昭和25〕年に花柳舞踊専門学校を開校した(田坂、1985：61)。房子渡布の前年(1954)には、吾妻徳穂が「アメリカへ行って日本の舞踊を世界へ紹介したい」とする願望を成就させ、全米巡演の一環としてハワイ公演を開催した(吾妻、1990：171-172)。このように日本舞踊は1950年代までに伝承体制の充実と発展が図られ、世界の檜舞台で一旗あげたいという訪米舞踊家の願望を受容する基盤が整っていた。仲嶺はおそらく、このような日本舞踊界の状況も鑑み、琉舞界の課題と芸術的水準の向上を提起したと考えられる。

## 5-2. 房子の活動がハワイの芸能界にもたらした影響

以上のように琉球舞踊の継承が喫緊の課題である時、房子が招聘された。房子の活動を当地の人々はどのように受けとめたのであろうか。

宮城師範談＝根路銘さんの舞踊は歌詞の意味を十分にのみ込み、それを表情で現わすうまさには驚くほかありません。…ハワイの琉舞も根路銘さんの指導で見ちがえるほど上達しました。(宮城絃聲會師範・宮城榮吉へのインタビュー記事<sup>32</sup>)

琉球舞踊のホープとしてその将来を囑目されている根路銘房子さんは去る一月催された泉川龍泉會名開き演劇會に招聘されて出演以来、その演技と氣品を高く賞賛され、単に同郷の人たちの間においてではなく、広く一般から深い関心を持たれております。…根路銘さんの来布によって、当地の舞踊界が一段と向上した上に、琉球舞踊そのものがこの地で客観性を持ったことも事実で、同嬢は齡若く

して其道の發展の上に大きな役割を果たしております。(「根路銘房子嬢“送別演藝”趣意書」<sup>33</sup>)

宮城榮吉は、歌詞の深い理解に基づく房子の表現力を評価し、房子の指導でハワイの琉球舞踊が上達したと述べている。さらに、泉川龍泉會、布哇琉球音楽協會、布哇沖繩人連合會で構成される根路銘房子後援會「趣意書」に、房子の演技が沖繩系移民だけでなく、一般の人々にも賞賛され「當地の舞踊界が一段と向上した上に、琉球舞踊そのものがこの地で客観性を持った」と記されている。房子の演技と指導は沖繩系移民内部には技能上達という成果をあげ、沖繩系以外の外部に対しては琉球舞踊の芸術性を認知させる役割を果たした。

当時のハワイ沖繩系移民は、ハワイ社会と日本社会の双方においてダブル・マイノリティ(Double Minority)であり、日本人であると同時に非日本人(non-Japanese)でもあるという複雑なアイデンティティを抱え、非日本人は日本人に劣るとする差別的なまなごしの中に置かれていた(Arakaki, 2007：26-27)。房子の舞踊が他のエスニシティに認知され評価を得ることは、取りも直さず沖繩系移民の劣等感の超克に繋がったと考えられる。

## 6. 房子と同時代に来布した琉球舞踊家

同様に音楽界の後押しによる舞踊界向上を図る沖繩系移民の活動は他にも確認できる。幸地亀千代の送別演藝會が、房子の送別大演藝會の前に催された。布哇琉球音楽協會と音楽関連団体の主催による。この演藝會の記事<sup>34</sup>に次のような記述がある。

平良リエ子、根路銘房子、仲宗根芳子さんたちの指導によって新人や中堅組の進出がめだち、その舞技も格段の進境を見せていることは事実で、いずれ本場の水準に達する日も近いであろう。琉球の傳統舞踊が力強く受け継がれていることを、心強く思った。

リエ子、房子、芳子の指導で新人や中堅に「格段の進境」がみられたとある。リエ子<sup>35</sup>は渡嘉敷守良の弟子で児玉清子<sup>36</sup>と東京・神奈川に琉球舞踊を普及した。1954〔昭和29〕年4月、ハワイのクラブ銀座社長から依頼を受け来布、翌年2月まで滞在し舞踊も教えていた(比嘉、1978：239)。芳子は金武良章に学び、1955〔昭和30〕年第二回タイムス社芸術祭でベストテン入賞後、ハワイに移住した<sup>37</sup>。房子と同時期に、両名も渡布し舞踊を教授している。1955〔昭和30〕年前後は、房子、リエ子の渡布と芳子の移住によって、ハワイ沖繩

系移民社会における琉球舞踊の継承が戦後本格的に着手された時期であった。

本来であればリエ子、芳子の活動も調査し、三者を比較すべきであるが、紙幅が限られているため、これについては稿を改めて報告したい。ただしここで明らかになった点は、房子とリエ子は一時的に渡布して戻ったのに対し、芳子はハワイに定住したことである。また、房子が公的な招聘を受けた一方でリエ子は私的な依頼であった。したがって本稿で引用した早稲田（2002）の「文化使節」の概念にあらば、この三者において房子は、戦後初の「文化使節」としての役割を担った琉球舞踊家として位置づけられる。

## 7. 房子にとってのハワイ時代（1955-1956）

以上、房子がハワイから招聘を受け沖縄芸能各界の支援と期待を担い「文化使節」として活動した足跡を資料に基づき辿ってきた。現在の房子にとってハワイ時代はどのような意味を持つのだろうか。当時のことを房子は2024年6月20日に筆者が行ったインタビューにおいて次のように振り返る。

あのときに選ばれていなかったら、<sup>今日の</sup>私はいないと思う。専門家として招かれたのだから「これはできません」は通らない。ハワイの人たちが一大プロジェクトを作って準備している。習いたいと言われた踊りを教えることが条件だった。だから朝は箏を、昼は田島先生、盛義先生…先生方は推薦人に名前を連ねているから皆、気持ちよく手を入れてくださった。後に主席になった當間重剛さんが自宅の部屋を提供し、先生方が集まってご指導くださった。私の舞踊家人生でこれ程の分量の集中稽古をしたことはない。教わったことを必死でノートに記録した。戦争ですべて焼けてしまったけど文化が残っていることを知らせる仕事。個人としてではなく沖縄の代表として、沖縄を背負ってハワイに行くのだから、言葉遣い、服装、立居振舞などすべてに責任を持たなければと思った。

資料に記名された推薦人や激励芸能会の賛助会員は、形式的に名を連ねるだけでなく、実質的かつ凝縮した稽古環境の中で技を授け送り出した。特筆すべきは、房子にとって初めての弟子がハワイ沖縄系移民だという。「外国に行って教えるには、何よりも表情と表現が大事だと思った。歌詞に惹かれて表情で表し、リズムを体で表現する」ような心がけたという。さらに続けて現在の心境を次のように語った。

私は毎朝祈る。私個人のためではなく沖縄芸能を知らしめてください。この体を通して文化を紹介する。死ぬのは怖くない。神様にお任せしている。神様がもう少し必要だからこの人は生かしておかないとねって。歳取って体が辛いことも多いけど、これをやらせてくださいとお願いしているのは私だから。この祈りはハワイが基礎になっている。17・18歳でハワイに渡ったときから責任を負い苦勞を積み重ねてきた。あの時教えてくださった先生方の御恩に報いるために。

沖縄芸能は、王朝崩壊後の日本化と沖縄文化の蔑視とあいまって衰退の一途を辿っていた。戦後は米政府の文化奨励政策の下、様々な施策によって再生に向かっていったが、当時の日本、そしてハワイ、アメリカにおいては未だ知られていないマイノリティの文化であった。この状況は程度の差こそあれ現在も続いている。房子は自らの体を通して沖縄文化を伝えることを使命としている。その強い使命はハワイに向けて動き出した時（1955-1956）に確立し、結婚して東京に居を移し活動の本拠を変えた後、より強靱な指針になったといえよう。

## 8. まとめ

本研究の目的は、志田房子のハワイ在任期（1955-1956）における活動を、ハワイと沖縄の絆を結ぶ「文化使節」として捉え、その実態を、新聞記事、公演プログラム、公文書等の資料、および房子本人へのインタビューに基づき明らかにすることである。これにより未だ知られていない房子の個人史の一端を解明するとともに当該活動の房子および沖縄舞踊史における位置付けを試みた。以下に結論を記す。

- (1) 房子は、布哇琉球古典音楽野村流泉川龍泉會はじめ布哇沖縄人連合から公式に招聘され、琉球政府文化財保護委員会の推薦と沖縄芸能各界からの支援を受け渡布した。その背景には、米政府による文化奨励政策、文部省芸術祭参加による日本復帰運動、琉球政府による文化財保存活用への機運、沖縄タイムス社主催芸能祭創設にみる文化復興運動など、戦後の衰退から復興に向かう沖縄の社会状況が存在した。房子は「沖縄再生」の象徴としてハワイに送り出された。
- (2) ハワイにおける房子の活動は次の4点である。  
- ①舞踊の披露と指導による二世・三世琉球舞踊家の育成、  
②野村流古典音楽の権威との協働による沖縄音楽界とハワイ音楽界との関係の強化、  
③沖縄の教育文化機関の要人との協働による講演や、メディア出演を通じた沖

縄芸能界の現状発信, ④学校公演等による琉球音楽舞踊の普及, である。当時, ハワイの芸能界は, 音楽の組織的發展に比し, 舞踊の継承体制が未確立で, 舞踊家の表現力養成を課題としていた。房子は, 移民二世・三世の中堅舞踊家らを向上に導き, 沖縄系移民内部だけでなく外部からも一定の評価を得て琉球舞踊の芸術性を知らしめた。

- (3) 房子へのインタビューからは, ①ハワイ出生に向けて, 多くの師が協働して房子に特別稽古を授けたこと, ②この時の特別稽古をこれまでの舞踊家人生の基礎となる重要な学びであったと捉えていること, ③個人ではなく琉球舞踊・沖縄文化の代表としてハワイ沖縄系移民に伝えるという使命をハワイ時代に確立したこと, ④その時に培った使命と行動様式は, 東京に転居・定住の後も揺るがない指針となって舞踊家・房子を律していることが明らかになった。

最後に, ハワイにおける房子の活動(1955-1956)の意義を記し, 沖縄舞踊史への位置付けとする。1952〔昭和27〕年, 日米安保条約発効によって, 沖縄は日本から切り離され引き続き米国の施政権下に置かれた。米政府は沖縄の安定的統治を図るべく沖縄文化奨励政策を施した。琉球政府およびメディアは文化財保護政策や文化復興運動を展開, 房子に「沖縄再生」の象徴的・社会的役割を託しハワイに送り出した。流会派が確立し組織内に閉じた伝承システムが流布している現在とは異なり, 房子は当時, 複数の師から推薦を受け特別集中稽古を受ける好機を得た。このとき本人は海外で成功したいという願望や野心は微塵もなく, 只々自身に課された期待と重圧を強い使命に変換しその任務を全うした。房子は, ハワイ音楽界と沖縄音楽界との関係強化と沖縄系移民二世・三世舞踊家の育成に寄与した。とりわけ琉球舞踊の芸術的水準を他の民族に認知させることに貢献し, 二重のエスニック・マイノリティと劣位に位置される沖縄系移民の心にささやかな希望を灯す役割を果たした。6年後の1962〔昭和37〕年, 房子は宮城絃声会(宮城榮吉代表)から招聘を受け, 琉球舞踊家として初の米本土公演<sup>37</sup>(後援:北米沖縄クラブ, 日商文化センター, 日系人記者クラブ他)を果たし「芸術としての琉舞」を広く米国民に伝えた。房子のハワイにおける「文化使節」としての活動(1955-1956)は, 「琉球舞踊における戦後初の海外公演」という一過性の「イベント」に留まらない。沖縄社会とハワイ沖縄系移民社会が直面する苦境を, 文化の力によって超克せんとする「プロジェクト」の一翼を担う実践であった。房子は, この「プロジェクト」で関わった人々の理念を, 先達の遺

志として継承し今も踊り続けている。

謝辞: インタビュー調査にご協力いただきました, 志田房子師に心より感謝申し上げます。また, 志田義則氏には故・新垣ツル氏より引き継いだ貴重な資料をご提供いただきました。ハワイにおける調査では東恩納良吉氏から移民の歴史と現況についてご教示を頂戴しました。記して謝意を表します。本研究はJSPS科研費23K20075の助成を受けたものです。

## 文献

- 1) 新垣松含記念誌編集委員会編, 2004, 『梨園の名優新垣松含の世界』, 松含流家元比嘉澄子: 那覇
- 2) 吾妻徳穂, 1990, 『女三味芸三味一如是の華一』(女の自叙伝), 婦人画報社: 東京
- 3) 遠藤美奈, 2015, 『ハワイの沖縄系移民による芸能活動と沖縄』 沖縄県立芸術大学大学院博士学位論文
- 4) 波照間永子, 2007, 「舞踊家オーラル・ヒストリー—児玉清子の生涯」, 『琉球・沖縄研究』, 創刊号, 61-88
- 5) 波照間永子, 2012, 「琉球文化の育む身体世界—志田房子のオーラル・ヒストリー—」, 瀬戸邦弘・杉山千鶴・波照間永子他著『日本人のからだ・再考』, 明和出版: 東京, 59-76
- 6) 比嘉武信編著, 1978, 『ハワイ琉球芸能誌: ハワイ沖縄人78年の足跡』, 比嘉武信: ホノルル
- 7) 真栄里泰球, 2017, 「舞の道 志田房子, 志田真木」, 『モモト』, Vol.30, 4-15
- 8) 真境名佳子伝刊行委員会編著, 2011, 『琉球舞踊に生きて 真境名佳子伝』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 9) 真境名由康一人と作品一刊行委員会編, 1987, 『真境名由康一人と作品一』(上巻・人物編), 真境名由康生誕100年記念事業会「真境名由康一人と作品一」刊行委員会: 那覇
- 10) 真境名由康一人と作品一刊行委員会編, 1990, 『真境名由康一人と作品一』(下巻・作品編), 真境名由康生誕100年記念事業会「真境名由康一人と作品一」刊行委員会: 那覇
- 11) 又吉光邦, 2010, 「喜宝院蒐集館にある尚順の還暦祝いの紅型手拭い(ティサージ)に関する一研究—顕微鏡写真と古文書(護得久朝章からの手紙)の翻刻—」, 『産業情報論集』, Vol.7, No.1, 65-84
- 12) 三隅治雄, 2011, 『原日本・沖縄の民俗と芸能史』, 沖縄タイムス社: 那覇
- 13) 宮崎義敬, 2013, 『繚乱の一人—Rieko Taira』, 展望社: 東京

- 14) 森田ゆい, 2020, 「琉球舞踊 立方 志田房子」, 『ようこそ伝統芸能の世界—伝承者に聞く技と心—』, 薫風社:東京, 128-135
- 15) 仲嶺眞助, 1978, 「舞踊家に望む」, 比嘉武信編著『ハワイ琉球芸能誌:ハワイ沖繩人78年の足跡』, 比嘉武信:ホノルル, 150-151
- 16) 日外アソシエーツ編, 2010, 『新撰芸能人物事典 明治~平成』, 紀伊國屋書店:東京
- 17) 沖繩藝能史研究会編, 1995, 『琉球芸能の先達 わが師を語る』, 那覇出版社:那覇
- 18) 大城學, 1991, 「玉城盛義の芸歴と芸風」, 『沖繩県立博物館紀要』17, 65-82
- 19) 琉球政府文化財保護委員会編, 1956, 『文化財要覧』1956年版, 琉球政府文化財保護委員会:那覇
- 20) [琉球政府] 行政主席官房文書課, 1954, 「文化財保護委員会規則」『公報』第82号, 46-47
- 21) 志田房子・志田真木・三浦雅士, 2021, 「琉球舞踊から東南アジアの海へ母娘二代で切り拓く日本舞踊の新たな可能性」『DANCE MAGAZINE』, 第31巻第6号, 68-75
- 22) 志田房子, 2024, 「舞い道一筋 重ねたる八十路」, 『致知』2024年1月号, 46-50
- 23) 鳥袋光裕, 1982, 『石扇回想録—沖繩芸能物語』, 沖繩タイムス社:那覇
- 24) 城田愛, 2000, 「踊り繋がる人びと—ハワイにおけるオキナワン・エイサーの舞台から」, 福井勝義編『近所づきあいの風景—つながり』を再考する』, 昭和堂:京都, 59-89
- 25) 高良和子, 2005, 『琉球舞踊 古典女踊りの母:比嘉清子伝』, 柳清本流和草の会:沖繩
- 26) 田坂, ジャック Y., 1985, 『ハワイ文化芸能100年史:日本人官約移民100年祭記念』, East West Journal Corp:ホノルル
- 27) 渡嘉敷守良, 1979, 「自叙伝」, 六世尾上菊五郎著者代表『日本の芸談 第四巻 舞踊 邦楽』, 九藝出版:東京, 281-317
- 28) 渡嘉敷守良記念誌編集委員会編, 2005, 『沖繩演劇界の巨匠 渡嘉敷守良の世界』, 渡嘉敷流守藝の會:与那原
- 29) 當間一郎編, 2020, 『沖繩藝能を語る:人物を中心に—わが師を語る』上巻・中巻・下巻, 當間一郎:沖繩
- 30) 早稲田みな子, 2002, 「南カリフォルニアの日系社会における日本人芸能人・音楽家たち—戦前におけるその「文化使節」としての役割と影響—」『東洋音楽研究』(67), 61-80
- 31) 早稲田みな子, 2022, 『アメリカ日系社会の音楽文化:越境者たちの百年史』, 共和国:東京
- 32) 山田貞子記念誌編集委員会編, 2007, 『山田貞子 舞の道 茶のこころ』, 貞扇本流貞扇会:沖繩
- 33) Arakaki, Robert K., 2007, “Theorizing on the Okinawan Diaspora” J. N. Chinen (Ed.), *Uchinanchu Diaspora Memories, Continuities and Constructions*. (Social Process in Hawaii Vol.42) Department of Sociology, University of Hawaii at Manoa: Honolulu, Hawai'i, 15-34
- 34) Sutton, R. Anderson, 1983, “Okinawan Music Overseas: A Hawaiian Home” *Asian Music* Vol.15, No.1, 54-80
- 35) Terauchi, Naoko, 2003, “The Meaning of Recent Changes in *Bon Odori* 盆踊り outside Japan: Choices Made by the People of Okinawan Origin in Hawaii” 『音楽学』第48巻3号, 207-221
- 36) Van Zile, Judy, 1996, “Non-Polynesian Dance in Hawaii: Issues of Identity in a Multicultural Community” *Dance Research Journal* 28/1, 28-50

注 (新聞記事・公演プログラムの出典, 人名・用語の説明)

- 文化庁「文化審議会答申」(2021年7月16日)にて宮城幸子と共に認定された。
- Shida, Fusako, 2003, “Words of Welcome and Appreciation” *Winds of Good Fortune-Imai no Kaze-*, Shisenmiyabi School of Okinawan Traditional Dance: Tokyo.
- ハワイ沖繩系移民社会におけるエイサーを対象とした研究に城田(2000), Terauchi(2003)等がある。
- 2018年10月23日-30日, 現地調査に赴き資料を収集するとともに, 房子から紹介を受けたハワイの弟子にインタビューを試みたが, 高齢化による体調不良や, 既に他界した者が多く実施できなかった。同様に沖繩側の関係者も既に逝去した者が多く資料を中心に調査を進めざるをえなかった。
- スタンフォード大学「邦字新聞デジタル・コレクション: ジャパニーズ・ディアスポラ・イニシアチブ (JDI)」(<https://hojishinbun.hoover.org/?l=ja>), 2024/3/25参照
- 琉球舞踊における免許制度は入門してからの期間と習熟度に応じ「教師」「師範」「会主」という段階的資格を得るのが一般的であるが, 名称や免許状授与の要件は流会派によって異なる。
- 根路銘房子後援会(主催)『琉球の舞姫—根路銘房子送別琉球演藝の夕』(プログラム)(1956[昭和31]年3月24日, フェリントン高校講堂)
- 『根路銘房子ハワイ公演激励芸能会』(プログラム)(1955[昭和30]年7月30・31日, 室川劇場, 8月8・9日, 那覇劇場)
- 沖繩県公文書館「移民関連文書」[https://www.archives.pref.okinawa.jp/okinawa\\_related/6140](https://www.archives.pref.okinawa.jp/okinawa_related/6140), 2024/3/28参照
- 真境名由康が1960年[昭和35]年, 創作作品に「真境名本流」という流名を冠した。3年後の1963[昭和38]年, 玉城盛義が「玉城流」を創設したのを機に, 他の流会派の創設が続いた。
- 「根路銘房子母子 挨拶に来社」『ハワイ報知』1955年8月20日
- 「キング知事に琉球舞姿の人形贈呈」『ハワイタイムス』1955年8月24日

- 13 “Dancing Queen of Okinawa Arrives to Perform Here” *Hawaii Times* (Aug. 20, 1955)
- 14 仲眞良樽金 [1902-1976]:父はハワイ琉球音楽の祖・仲眞良永。父、奥間盛正、西島宗二郎、幸地亀千代に師事。1961 [昭和36]年、良金に改名しロスに転住。1964 [昭和39]年、沖繩本部協会(野村流)より功労賞受賞(比嘉, 1978:16-17)。
- 15 宮城榮吉 [1922-没年不詳]:仲眞良永に師事。良樽金とハワイ野村流音楽の地盤を築く。1956 [昭和31]年北米ロスに転住, 1959 [昭和34]年、野村流宮城絃声会発足。野村流音楽協会北米支部初代支部長, 沖繩本部協会(野村流)および琉球新報社より功労賞受賞(比嘉, 1978:17-18)。
- 16 「仲眞、宮城兩師範表彰状傳達式、幸地、根路銘歓迎會で」『ハワイ報知』1955年8月20日。
- 17 「琉球舞踊と私」『ハワイタイムス』1956年1月1日
- 18 「奥義は“静中動”美しい琉球の舞姫 根路銘房子さんに聞く」『ハワイタイムス』1955年8月27日
- 19 「コザが生んだ舞姫ハワイから便り“四月に良い事がある”」『中部情報』1956年3月10日
- 20 「京マチ子にも劣らぬ明眸“琉球の舞姫”根路銘房子嬢ハワイで引張だこ」『琉球新報』1955年11月7日(夕刊)
- 21 護得久朝章 [1890-1957]:琉球王国第二尚氏の分家「護得久御殿」15世。戦後、沖繩諮詢会の財政部長, 沖繩民政府財政部長, 琉球銀行主席理事・会長, 琉球大学財団委嘱理事を歴任(又吉, 2010:71)。
- 22 「護得久朝章氏の琉舞の解説と實演」『ハワイタイムス』1955年12月3日
- 23 高嶺秀子 [生没年不明]:軍人花嫁として戦後來布。1947 [昭和22]年より沖繩救済の募金演芸会に出演。1948 [昭和23]年琉舞教授開始(比嘉, 1978:234-235)。
- 24 「根路銘嬢の舞踊に絶賛の嵐 開場一時間前に札止 泉川龍泉會大演藝會盛況」『ハワイタイムス』1956年1月14日
- 25 「前景氣盛んな琉球大演藝會」『ハワイタイムス』1956 [昭和31]年1月11日
- 26 「西原村人會總會新年宴」『ハワイタイムス』1956年2月17日
- 27 「琉球の舞姫根路銘房子嬢 女優として日活入社」『ハワイタイムス』1956 [昭和31]年3月13日
- 28 「銀幕入りを飾る 送別舞踊の夕 鯨詰めめの観客を酔わす」『ハワイ報知』1956 [昭和31]年3月26日
- 29 繪島洋太郎は「根路銘房子嬢送別琉球演藝の夕」で舞台係を務めた外間勝美の筆名である。
- 30 繪島洋太郎「琉球舞踊の將來について」『ハワイタイムス』1955 [昭和30]年5月19日
- 31 日本舞踊がハワイ社会に浸透していたからか、房子を紹介した記事には「花柳や藤間の流派に属していない」と説明されている。“Miss Nerome, Okinawa Dancer Will Teach Here” *Hawaii Times* (Sep.12, 1955)
- 32 「早くも話題の焦点 根路銘房子さんハワイで正月公演」『琉球新報』1956 [昭和31]年12月24日
- 33 根路銘房子後援會・泉川龍泉會(主催)、布哇琉球音楽協会・布哇沖繩人連合會(後援)「根路銘房子嬢“送別演藝の夕”趣意書」(1956 [昭和31]年3月吉日)
- 34 「気品ある琉舞に満場ただ恍惚幸地師範送別演藝會」(『ハワイ報知』1956 [昭和31]年3月10日)。
- 35 平良リエ子 [1929-]:玉城盛重・新垣松倉に学んだ謝花敬三に師事した後(宮崎, 2013)、渡嘉敷守良の門下に入り児玉清子らと東京・神奈川における琉舞の普及に尽力した(三隅, 2011:164)。
- 36 児玉清子 [1914-2005]:渡嘉敷守良に師事。1948 [昭和23]年、横浜に東京・沖繩芸能保存会を創設。日本文化振興会国際芸術文化賞、琉球新報賞を受賞(日外アソシエーツ 2010:325-326)。
- 37 仲宗根芳子 [1933-2022]:個人アーティストフェローシップ(ハワイ州)、レガシー賞(ハワイ沖繩連合協会)他受賞。National Endowment for the Arts ‘Linne Yoshiko Nakasone’ (<https://www.arts.gov/honors/heritage/lynne-yoshiko-nakasone>) 3/28, 2024 Access
- 38 「米本土へ招かれる 根路銘房子さん琉球舞踊家として最初」『琉球新報』1962年1月6日、「琉舞界のホープ 根路銘房子さん來羅」『羅府新報』1962年1月16日